

塩原温泉



6つの泉質に7色の温泉 名だたる文人が愛した

人を魅了してきた圧倒的渓谷美

大きな岩々の間を駆け抜ける限りなく透明な青緑色の清流。その上にかけてられた吊り橋から上を仰ぎ見ると、心なしか空が高く感じられる。渓流を生む滝の数は70に及び、一体の空気を澄



川瀬巴水(塩原猿岩)

ましてくれているようだ。
この場所に温泉が発見さ

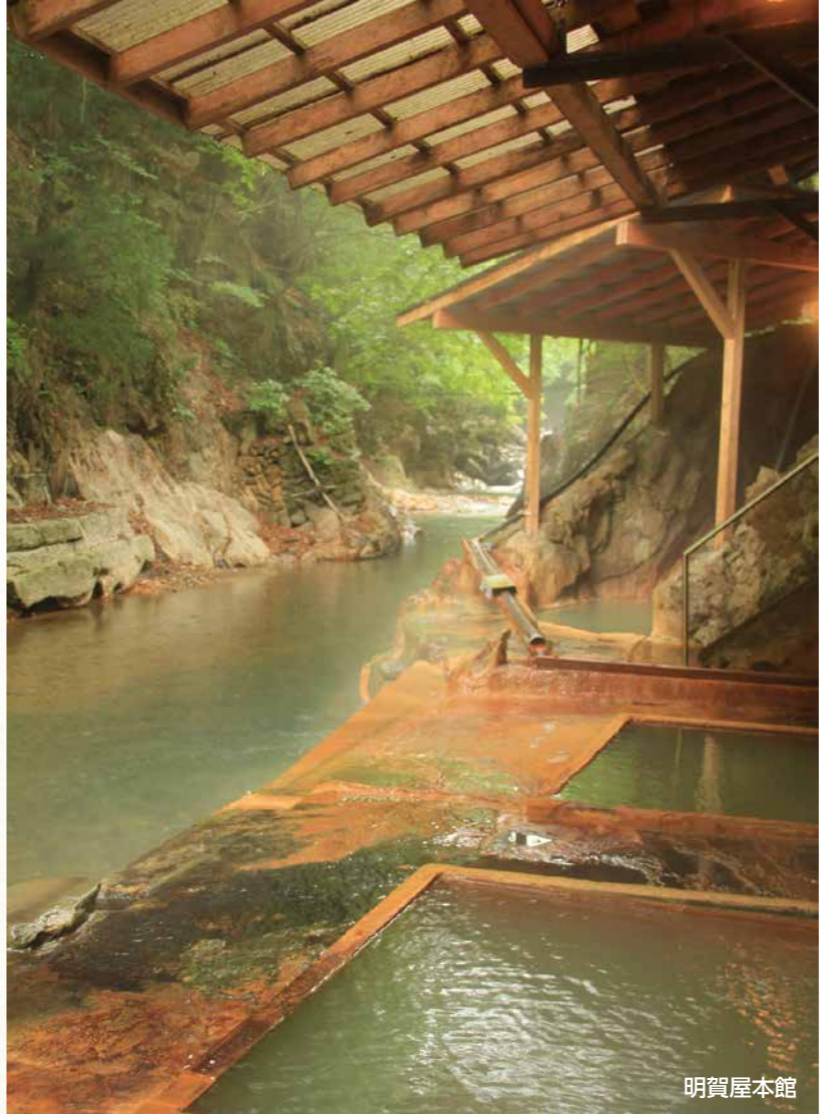
れたのは、今から1200年以上前の大同元年(806年)。それ以降、湯治場としての歴史を歩んでいたが、明治期に塩原新道の開削と塩原軌道(鉄道)の敷設により、交通の便が良くなった

ことから隆盛を見せ始め、次第にその名が全国に知られるようになった。それ以降、政府の要人や華族をはじめ、尾崎紅葉や国木田独歩などの文豪や、高橋由一などの画家が多く来訪。温泉と渓谷美を愛でてきた。

さらに、大正天皇の塩原御用邸が建てられたことで、一層人気に拍車がかかり、一大別荘地としての地位を確立。それらの歴史は、塩原の各所に立つ文学碑や「塩原温泉天皇の間記念公園」などからも伺い知ることができる。

多様な泉質と豊富な湯量

10種類ある泉質のうち炭酸水素塩泉や硫黄線、塩化物線など6種が揃っているのは全国でも有数。また、毎分1万リットルが湧き出し、源泉の数も150を誇る。そのため、至るところに共同浴場があり、その数は20以上。今でも地域の住民に利用されており、塩原では温泉がとても身近な存在だ。



明賀屋本館

板室温泉



温泉文化 生活文化

そして芸術文化を味わう



かつて板室温泉にあった共同浴場

いわずと知れた「下野の薬湯」

黒磯の市街地から那須連山の西端に車を走らせること30分。のどかな田園風景を抜け、清流、木の俣渓谷を越えると、急に視界がひらけてくる。那須の雄大な山々からの雪解け水が流れる那珂川に沿って、旅館が静かに立ちならぶ。

平安の康平2年(1059年)に、発見された板室温泉。会津中街道の開通から江戸時代の末期まで約1世紀半に渡り、街道の宿場町として栄えたその温泉地は、古くよりその効能の高さから「下野の薬湯」と呼ばれ、湯治の里として親しまれてきた。

独自の入浴法「綱の湯」

湯温は約40℃と少しぬるめ。泉質は無色透明アルカリ性単純温泉で、時間をかけて体の芯まで温めることができる。綱につかまり、立ったまま深めの浴槽につかる板室温泉独特の「綱の湯」。胸からつま先まで水圧がかかる



幸乃湯温泉



板室温泉街にある倉庫美術館には、現代美術作家・菅木志雄の作品約200点が常時展示されている

今なお続く文化の芽吹き

古くからの湯治場として、独自の文化を育んできた「板室温泉」。最近もその文化の歩みは足を止めない。その一つとして、最近注目を浴びているのが現代アート。鳥のさえずりと川のせせらぎに包まれ、芸術を堪能できる。

ので、末端の毛細血管まで血行が良くなり、入浴の効果がさらに高まるという。その効能は、杖について療養に訪れた湯治客が、帰るときには杖がいらないほどに回復したことから「杖いらずの湯」とも称されるほど。板室温泉神社には、要らなくなった杖が奉納されている。

6つの泉質と7色の温泉を武器に、満足いただけるおもてなしを



君島 将介氏
塩原温泉観光協会会長

さんは減少。団体から個人への旅行形態の変化も影響が大きかったという。「当時100軒以上あった旅館は、今では50軒あまり」と少し肩を落とした。

「温泉好きのお客さんなら、泉質の良さを分かってくれるはず。我々は一人一人のお客さんに満足してもらえる“おもてなし”を続けていだけ」。そう語る彼からは、塩原の泉質に対する絶対の自信が伺えた。

「スマートボールというピンボールに似たゲームや、手打ち式パチンコ、射的なんかもありましたね」。日本がバブル全盛の頃、繁栄を極めた塩原温泉を君島氏は振り返る。浴衣姿の観光客が温泉街を練り歩き、土産物屋や飲食店には人があふれていたようだ。

当時は会社の忘年会や新年会を始めとした慰安旅行がほとんどだったため、バブル崩壊により企業の業績が悪化すると、お客

室。「医者でも治らない病が、温泉で治る」と身体の不調を癒しに、1週間以上滞在する湯治客も多かった。しかし、大規模資本の旅館台頭などにより徐々に客足は遠のき、さらに福島原発事故により激減。

「それでも、我々には良質な温泉が豊富にある。各旅館の個性を活かしながら、団結して板室の癒しを提供していきたい」と力強い眼差しで、彼は未来を見つめていた。

歴史ある湯治場として、これからも癒しを提供していきたい



荻原 正寿氏
黒磯観光協会会長

「どこの旅館も満室で、泊めてあげられない」。最盛期の平成2年には、こんな悩みを持つこともあったという。当時を振り返ると気持ちが昂るようで、荻原氏の言葉にも力が入る。「あの頃は凄かった。私の旅館にも1日1,000人ほどの日帰り入浴客が来て、目が回るような思いだった」。

泉質に惚れ込んだお客さんが、新しいお客さんを連れてきてくれ、旅館はどれも満